

concert

ザルツブルク
モーツァルト週間
活気と魅力にあふれた音楽

2020年のモーツァルト週

開催中に武漢が閉鎖、21年はオンライン開催、22年は中止を経て、アンドラーシュ・シフ（D）が率いるカペラ・アンドレア・バルカのダ・ポンテ3部作連続演奏も中断、ようやく第2弾の《ドン・ジョヴァンニ》を1月27日に聴くことができた。

古楽的アプローチで演奏するには岩窟乗馬学校ホールは広過ぎるのか、「序曲」は効果が薄かった。歌手陣を導く指揮ではないが、《彼女の幸福こそ私の願い》の前奏などチェンバロ演奏や装飾音の選択などは秀逸だ。

歌手のベストはユリアン・ブレガルディエン（T）で、美しい声の純粋なドン・オッターヴィオを演じた。J・S・バッハふうではあるが、モーツァルトの時代にはこんな歌手もいただろう。題名役のヨハネス・カムラー（Bs）は柔らかな声に色気があるが、ドイツ的。レボレッツォのマウリツィオ・ムラーロ（Bs）は唯一のイタリア人として、イタリア語の芝居を支えた。ドンナ・エルヴィーラ役のマグダレーナ・コジェナー（Ms）はヴェルビエで同役を聴いたときよりもパワーダウンしていて、歌詞も聞き取りにくい。ドンナ・アンナのシルヴィア・シュヴァルツ（S）は声が細過ぎる。ツェルリーナ役のユリア・レージネヴァ（S）は聴くたびに声が太くなるが、男たちを操っているように聴こえるほど肝の座った歌唱だ。マゼットのジュリアン・ファン・メレルツ（Bs）も好演。騎



モーツァルト週間2023から《ドン・ジョヴァンニ》
©WolfgangLienbacher_3365

●Concert Data

モーツァルト週間

〈期間・開催地〉1月26日～2月6日・ザルツブルク
〈出演〉ユリアン・ブレガルディエン（T）、ヨハネス・カムラー（Bs）、マウリツィオ・ムラーロ（Bs）、マグダレーナ・コジェナー（Ms）、シルヴィア・シュヴァルツ（S）、ユリア・レージネヴァ（S）、ジュリアン・ファン・メレルツ（Bs）、ロバート・ホル（Bs）、ローランド・ピリヤソン（T）、エウローパ・ガランテ、ファビオ・ピオンディ（指揮）、ジャンジャコモ・ピナルディ（g）、他
〈曲目〉モーツァルト「歌劇《ドン・ジョヴァンニ》」
「交響曲第11番」「同第13番」「同第30番」「ルチオ・シルラ」序曲、〈ポントの王ミトリダーテ〉序曲、〈アルバのアスカニオ〉序曲、他

士長のロバート・ホル（Bs）は75歳と考えるとすごい。
ローランド・ピリヤソン（T）のセミステージは、真面目になりすぎるシフ流モーツァルトに笑いを運んできた。上演中も客席でチェックし、休憩中に舞台裏へ急ぐ彼に出会うと、疲れた顔で来場を感謝された。当音楽祭の総裁としてコロナ禍を乗り越えるのは苦労が絶えないのだろう。
翌朝はエウローパ・ガランテが10年ぶりに当音楽祭に戻ってきた。指揮するファビオ・ピオンディが「イタリアのモーツァルト」に見えるほど、オール・モーツァルト・プログラムを自作のような自由さで演奏した。《ルチオ・シルラ》序曲に続き、「交響曲第11番」ではヴィオラの美しさと第2ヴァイオリン首席の先導力が光った。「第13番」ではドラマ性とメランコリーが際立ち、チェンバロとギターが美しかった。ジャンジャコモ・ピナルディのギターに浸れるだけで幸せ、と思わせる特別な音だ。「ポントの王ミトリダーテ」序曲、「アルバのアスカニオ」序曲と続き、彼が退出した最後の「交響曲第30番」は喪失感を感じるほどだった。全般的にモーツァルトの活気と魅力にあふれたマチネとなった。（中東生）